

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 8 日現在

機関番号：15201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24520216

研究課題名(和文) 文政期読本の基礎的研究

研究課題名(英文) A basic research on yomihon produced in Bunsei period

研究代表者

田中 則雄 (Tanaka, Norio)

島根大学・法文学部・教授

研究者番号：00252891

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：日本近世後期の本格的長編小説である読本は、文化期(1804-1818)において隆盛し、続く文政期(1818-1830)には下降停滞したと考えられてきたが、本研究の結果、文政期においても、制作活動は維持されつつ、新たな展開を見せていることが明らかになった。

すなわち文政期においては、長編化が一層推進され、また実録・人情本と関連を持つ作品が現れている。これらは長編小説としての構造を明確に意識した上で制作されている。

研究成果の概要(英文)：It was once thought that yomihon, full-length novels in the late Edo era, which were the most typical and orthodox, became the most prosperous in Bunka period(1804-1818), and stagnated in Bunsei period(1818-1830). However, our study found out that yomihon-novels were produced continuously and entered on a new phase in Bunsei period.

During this period, yomihon-novels became longer and longer, and some of them were related to jitsuroku or ninjobon. The writers were definitely conscious of structure as a full-length novel.

研究分野：日本文学

キーワード：日本近世文学 近世小説 読本

1. 研究開始当初の背景

近世後期の本格的長編小説である 読本は、従来の研究において、享和期(1801-1804)頃から次第にその様式を整え、文化期の前半(1804-1810頃)に隆盛を迎え、やがて文政期(1818-1830)に入ると停滞に陥ったと解されてきた。このことから、山東京伝・曲亭馬琴など文化期の作者と作品が主要な研究対象とされ、一方文政期の作品に関しては取り上げられる機会が極めて少なかった。しかし本研究メンバーを中心とする近年の調査研究によって、文政期の読本には、文化期の方法を受け継ぎつつも新たに展開させた特有の作風が認められることが明らかになってきた。このことから、文政期読本各作品に即して基礎的な調査研究を行い、その意義について再検討することが必要であると考えられるに至った。

2. 研究の目的

読本は文政期に至ってもコンスタントに制作され、且つ文化期とは異なる特色を生じているとの見通しを得、このことについて検証していくこととした。

文政期読本においては、実録、演劇等からの典拠取り、同じ文政期に生成発展したジャンルである人情本との近接などのことが生じている。これらの点を中心に、各作品に即した検討を行い、そこから文政期読本全体を俯瞰してその特色を把握することを目的とした。

3. 研究の方法

従来の研究において、文政期読本の全体像の把握も、個別の作品に関する論及も十分に行われていない。そこでまず、文政期読本と認定し得る書目を確定し、それらを成立年代順に整理すること、また各作品についてその特色意義を記述する解題を作成することを課題とした。前者を「文政期読本年表」、後者を「文政期読本解題」と称する。

まず「年表」作成の前提として、諸本の書誌調査を元に成立時期を明確にし、文政期読本と認定できる書目を確定する。「解題」は分担執筆とし、共同研究会においてその原稿を元に討議し、結果を反映させて修正する。

そしてこの「年表」と「解題」を増補改訂しながら、特に以下のような文政期読本に関する問題について解明する。

(1)他ジャンルとの交流

文政期読本のうち、実録・演劇等に依拠するものについて、そこに読本独自の様式に沿った変更がなされていることを指摘する。

同じ文政期に生成発展した人情本と近接する特徴を有する作についても、近似点を整理した上で、なお読本独自の表現様式に拠っていることを明らかにする。

(2)続きもの読本

文政期には、初編・二編・三編の如く続刊して長大化していく作品が見られる。その実

態について明らかにする。

(3)改題本と嗣作

文政期において、文化期以前の作を改題して出版する例が多く見られる。また文化期以前に出て一旦途絶していた読本を、文政期の作者が書き継いで続編として出版することが度々行われている。

(4)新興作者

文政期に読本制作を開始し、この期に精力的に活動した作者が存在する。

(5)文政期読本作風の一端

文政期に制作された読本には、文化期に曲亭馬琴が打ち立てた如き作法とは異なるものの、やはり長編小説としての構造を保つことを意識した方法が採られている。このことについて、南里亭其楽(なんりていきらく)の「仇討もの 読本等を中心に検討する。

4. 研究成果

本研究の成果報告集として、『文政期読本の基礎的研究』を刊行した。本書は、「文政期読本総説」「文政期読本解題」「文政期読本年表」より成る。前項(3. 研究の方法)に記した(1)~(5)の論点について「総説」にまとめて論じた(具体的な内容については後述)。

「年表」においては、従来の研究(例えば『日本小説書目年表』など)において文政期成立とされていた作の中に除くべきものがあること、また反対に新たに認定すべき作があることを指摘した。その上で「解題」において、現時点で文政期読本と認定できる作については、『読本事典』(2008年、笠間書院刊)に収録の作を除き悉皆的に取り上げることとし、計82点に関して、書誌的事項、読本としての特色意義を記述した。ここでは、作品の梗概のみならず、作法、様式等の問題にも論及している。

「総説」では、まず「文政期読本概説」の項を立て、文政期12年間に総計112点(1年平均9.3点)の読本が刊行されており、決して制作活動が終熄に向かっているものではないことを示した。その上で、文政期読本の特質に関わる上掲(1)~(5)の点について検討を行った。以下、その要点を述べる。

(1)他ジャンルとの交流

実録を典拠として読本を制作するという方法自体は、既に享和~文化初年(1801-1810頃)の速水春暁斎の作(絵本もの 読本)に見られるが、これが文政期に至っても継承されている。以下実例を挙げ、そこに見られる作法上の特質について述べる。

為永春水『幼婦孝義録』(文政9年 1826刊)は、近世後期に流布した実録『西国順礼女敵討』に依拠した読本である。人物や全体の筋も実録に大きく拠っている。しかし読本化を行うに当たって、人物たちの内面に踏み込み、そこから更に各々の人物の生き方を描き、それが相互に繋がりながら最終的に統合されていくという構図が導入されている。典拠の実録『西国順礼女敵討』においては、石

井常右衛門が、非業の死を遂げた妻の敵を討つ話を中心をなす。一方読本『幼婦孝義録』では、この一連の事件に至る前の、石井と遊女高尾に関する話の中で、高尾が石井に真の恋情を抱くものの思いを遂げられず、悲嘆の余り発心したとし、以後信仰の中で自分の生き方を全うすることを描いた。結果作中、石井常右衛門の人生、高尾の人生という大きな二つの流れが形成され、結末部分でこの両人が再開を果たすと設定したことで、これらが統合されるという形を示した。以上の如く、典拠の実録には無かった、高尾の純愛・発心譚を設けることで、長編小説としての構造を備えた作に至らしめている。

同じく為永春水の『絵本荒川仁勇伝』(文政13年1830頃刊)は、実録『荒川武勇伝』に依拠する。「絵本」と名乗るところは、速水春暁斎等による前掲絵本もの読本(実録に依拠して挿絵を多く入れた読本)を意識したとも考えられるが、実際には一巻あたり2~3図程度しか挿絵を入れていない。この他の文政期読本にも「絵本-」と称しつつ挿絵の少ない作の例は指摘でき、この期の一つの特色と認めることができる。

東里山人(とうりさんじん)『千代物語』(文政10年1827刊)について、これが実録『山陽奇談』を典拠とすることを明らかにした。周防国岩国に伝存したとされほとんど流布していないこの実録を元に、江戸作者の東里山人が読本化を行ったものである。人物、全体の筋、行文とも実録をほぼ踏襲しているが、ここでも読本としての構造を持たせるべく、事件と事件との関連づけを明確化するなどの改変がなされている。

演劇との関係について言及する。一溪翁野人『楠家外伝彌生佐久羅(なんかがいでんやよいざくら)』(文政2年1819刊)は、浄瑠璃・歌舞伎の趣向から強く影響を受けている。また南里亭其楽『駒若全伝逆櫓松(こまわかぜんでんさかのまつ)』(同年刊)は浄瑠璃『ひらかな盛衰記』に拠りつつ、各人物の来歴に繋がりをを持たせるなど、読本化に際しての変更の跡が見える。

(2) 続きもの読本

文政期には続刊によって長大化していく作品が見られるが、瀬川如臯『鼎臣録(ていしんろく)』(文政6年-天保6年1813-1835刊)では、人物たちの伝を一つ一つ重ねていくという方法によって、また好華堂野亭『楠正行戦功図会(くすのきまさつらせんこうずえ)』(文政4年1821、同7年1824刊)では、通俗軍談(『通俗三国志』)の趣向を摂取して話を設けるという方法によって、全体の長編化が図られていることを明らかにした。

(3) 改題本と副作

改題本に関しては、文政期に刊行された読本のうち、『曠世奇談』(文政元年1818刊)が『拍掌奇談風草紙』(寛政4年1792刊)の改題本であるなど、6件の例が判明した。

それらは24~45年前という、年月を経過した作品を改題出版している点に特色がある。

副作に関しては、文化期に何らかの事情で一旦刊行が止まり、文政期にそれを副いで書かれた10件を指摘した。文化3年(1806)振鷺亭(しんろてい)の『春夏秋冬春編』を、文政元年(1818)に栗杖亭鬼卯(りつじょうていきらん)が副いで『四季物語夏編』を刊行した例などである。このうち半数の5例は、別作者による副作である。

新たな作品を書き起こすことと併行して、このように改題本の出版や副作の営みが行われていることも、文政期の特色と認めることができる。

(4) 新興作者

文政期の読本作者には、既に文化期から活動を続けている曲亭馬琴や小枝繁(さえだしげる)などがいる一方で、この期に入ってから新たに加わった新興作者たち 為永春水、好華堂野亭(こうかどうやてい)、岳亭丘山(がくていきゅうざん)、東里山人らが存在する。彼らの執筆活動の実態を、作品数の集計分析に基づいて跡付けた。

(5) 文政期読本作風の一端

南里亭其楽は、文政期に仇討もの読本を続刊している点で際立つ。すなわち、『復讐普通筋(かたきうちほまれのおしや)』(文政元年1818刊)、『曩小説打出浜(むかしがたりうちでのほま)』(同年刊)、『復讐美鳥林(かたきうちみどりのはやし)』(同3年1820刊)、『絵本報仇誓笛摺(えほんかたきうちちかいのおいずる)』(同9年1826刊)の諸作である。善人が悪人の手によって非業の死を遂げ、遺された者が報讐を成就するというのが敵討譚の筋であり、それ自体は確かに単純なものである。しかし其楽の作は何れも、この筋に絡めつつ、その底部に全編にわたって関与する要素 人物の生き方や心情に関わるものを設定している。またそこには、人の心に関して、善悪を固定的に捉えず、悪の増長や改悛などに立ち入って描く態度が存する。このことを、文政期読本に存する特徴の一つと認める。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計29件)

田中則雄、河本家に伝存する近世実録と読本、瀧雲、18、査読有、2016、pp.24-45、<http://ir.lib.shimane-u.ac.jp/metadatas/34842>

藤澤毅、『俊傑神稲水滸伝』における悪君、君たらざれば、読本研究新集、8、査読有、2016、pp.53-70

田中則雄、文政期読本と実録、日本文学、64-10、査読有、2015、pp.25-35

田中則雄、地方における実録の生成 因幡・石見の事例に即して、文学、16-4、査読無、2015、pp.82-96

菊池庸介、敵討ち物実録「創作」の一方法 『荒川武勇伝』を例に、文学、16-4、査読無、2015、pp.110-124

藤澤毅、『俊傑神稲水滸伝』序論、読本研究新集、7、査読有、2015、pp.91-107

藤澤毅、『小説東都紫』論 『天明水滸伝』の使用、鯉城往来、18、査読有、2015、pp.11-32

大屋多詠子、馬琴と近松、読本研究新集、7、査読有、2015、pp.64-79

大屋多詠子、曲亭馬琴の「大小の弁」、日本文学、64-4、査読有、2015、pp.66-70

木越俊介、詐術としての読本 『著作堂旧作略自評摘要』にみる作為の評価、読本研究新集、6、査読有、2014、pp.5-20

田中則雄、大江文坡における思想と文芸、読本研究新集、6、査読有、2014、pp.87-103

木越俊介、絵入根本の成立から定着まで、国語と国文学、91-5、査読有、2014、pp.63-74

田中則雄、出雲国仁多郡木地谷敵討の実録、山陰研究、6、査読有、2013、pp.1-15、http://albatross.soc.shimane-u.ac.jp/src/kiyo/kiyobase/zzz006/006_t01.html

藤澤毅、『鎮西菊池軍記』における『厭蝕太平楽記』(『真田三代記』)、鯉城往来、16、査読有、2013、pp.31-49

田中則雄、読本における尼子史伝、山陰研究、5、査読有、2012、pp.1-15、<http://albatross.soc.shimane-u.ac.jp/src/kiyo/kiyobase/zzz005/005-t01.html>

木越俊介、武内確斎『絵本室之八島』考、上方文藝研究、9、査読有、2012、pp.1-11

〔学会発表〕(計4件)

大屋多詠子、曲亭馬琴の日常、国際シンポジウム「日常とは何か、西欧の場合、日本の場合」、2015年12月6日、青山学院大学(東京都)

菊池庸介、『荒川武勇伝』の方法 敵討ち物実録の作られ方、西日本国語国文学会、2014年9月14日、梅光学院大学(山口県)

〔図書〕(計4件)

西日本近世小説研究会(田中則雄・藤沢毅・菊池庸介・木越俊介・菱岡憲司・大屋多詠子・天野聡一・三宅宏幸・中尾和昇)『文政期読本の基礎的研究』西日本近世小説研究会、2016、124

木越俊介、江戸大坂の出版流通と読本・人情本、清文堂出版、2013、304

6. 研究組織

(1) 研究代表者

田中 則雄(TANAKA, Norio)
島根大学・法文学部・教授
研究者番号: 00252891

(2) 研究分担者

藤澤 毅(FUJISAWA, Takeshi)
尾道市立大学・芸術文化学部・教授
研究者番号: 20289268

菊池 庸介(KIKUCHI, Yousuke)
福岡教育大学・教育学部・教授
研究者番号: 30515838

木越 俊介(KIGOSHI, Shunsuke)
山口県立大学・国際文化学部・准教授
研究者番号: 80360056

菱岡 憲司(HISHIOKA, Kenji)
有明工業高等専門学校・一般教育科・准教授
研究者番号: 10548720

(3) 連携研究者

大屋 多詠子(OHYA, Taeko)
青山学院大学・文学部・准教授
研究者番号: 50451779